

## 日本の大学図書館員の論じる世界の大学と図書館 ～ 6 / 25開催のシンポジウムを振りかえりつつ～

---

日時：2016年7月1日（金） 18：25～20：00

場所：同志社大学 今出川キャンパス 良心館1F RY106教室

パネリスト：

飯野勝則（佛教大学図書館）

今野創祐（京都大学附属図書館）

久保山健（大阪大学附属図書館）

長坂和茂（京都大学附属図書館）

司会：江上敏哲（国際日本文化研究センター）

（編者註：このアンサーシンポジウムの様子は動画でもごらんいただけます。スライド、フリップ、会場の様子についてはそちらをご参照ください。<https://www.youtube.com/watch?v=GeazV807vak>）

原田：お待たせいたしました。今から始めさせていただきたいと思います。今日は先週のシンポジウムのアンサーシンポジウムということで、日本の大学図書館員4名の方に集まっていたいてお話をいただくということにしたいと思います。それではお願いします。

江上：国際日本文化研究センターの図書館で司書をしております、江上敏哲と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。先ほど原田先生からご紹介ありましたように、先週6月25日土曜日に同じくこの同志社大学で「ライブラリアンの見た世界の大学と図書館」というようなシンポジウムをやりました。そこでは、アメリカの日本研究のライブラリアン4名に来ていただいて、それぞれの大学の紹介ですとか、図書館でどんなことが行われているかとか、図書館の利用者はどんな利用方法をとっているかというのをお話していただきました。それを元に関西を代表する、いや日本を代表する4人の大学図書館員の皆さんに来ていただきまして、先週のシンポジウムの話を聞いてどう感じたか、ど

んなことを考えたか、そしてどういう意見があるかというのを、それぞれに語っていただき、アンサーソング？ならぬアンサーシンポジウムというなかたちで今日はお送りしたいと思います。

久保山：大阪大学図書館の久保山と申します。現在は受け入れ担当の仕事をしておりますが、過去にはシステム担当ですとか学習支援の仕事をしていました。そういう観点からもお話できればと思います。よろしく申し上げます。

今野：京都大学附属図書館の今野と申します。附属図書館とは言いますが、宇治分館という宇治キャンパスにある理系の専門図書館で、主に閲覧業務や雑誌の受け入れ業務、図書館間の相互利用業務などをやっております。よろしく申し上げます。

長坂：京都大学附属図書館電子リソース掛の長坂と申します。電子リソース掛というのは名前と実は反して主に紙の雑誌を扱っている係なのですが、紙の雑誌と電子ジャーナル、それからちょっと電子ブックも扱っています。その前は工学研究科の化学の図書室にもいましたので、理系の専門図書室という観点も少しは分かっているつもりです。よろしくお願ひいたします。

飯野：佛教大学図書館の飯野と申します。担当はウェブスケールディスカバリーを始めとするシステム、それから e-resource です。よろしくお願ひいたします。

江上：ありがとうございます。ではその4人の方には後ほどいろいろご意見いただくとして、まず最初に10分か15分ほどお時間をいただきまして、先週6月25日に行われたシンポジウムの内容を簡単に振り返ってみたいと思います。ですので、今日ここにおいでになった皆様、あるいは Ustream をご覧になっている皆様方で先週のシンポジウム聞いていないよと、知らないよという方は、この時間を使って前回どんなことがトークされたのか、どんなことが紹介されたのかというのをひと通り予習していただきたいと思います。その後3つのテーマでこの4人の皆さんにいろいろディスカッションしていただきます。黒板に書いてますけれども、最初に、学生はなぜ図書館に来るのか、それから2つ目、ウェブスケールディスカバリーに慣れたユーザに対して司書は一体どういった役割を持つことができるのか、何をしたらいいのか。もう1つ、日本のデジタルアーカイブ、電子資料、電子書籍や電子ジャーナルは何がだめなのかと、というようなことについていろいろとトークしていただこうというような感じです。

では、先週、6月25日に行われたシンポジウムの内容をちょっと振り返ってみたいと

思います。(以下スライド・写真を投影しながら) これだけ来たんです人が。びっくりしましたよね。嘘かと思いました。こんな日が毎日続けばいいのと思いました。メインゲストがこの4人です。それぞれどんなお話を最初にしてくださったかというのを紹介していきたいと思います。

右端から、ハーバード・イェンチン図書館のマクヴェイ山田久仁子さんのお話では、大学内に70くらいの図書館がある。その中でもハーバード・イェンチン図書館は東アジア専門の図書館であって、図書140万冊に及ぶ。普段は日本語の蔵書のコレクションを管理する蔵書構築やレファレンスを主に担当しています。過去に現代日本研究資料センターという、ハーバード大学の中に日本語の資料を扱う図書館が2つあるんですね、その片方を経て、現職である、というようなお話がありました。それから2人目が男性の方でしたけれども、グッド長橋広行さん、ピッツバーグ大学の図書館の方ですね。ピッツバーグ大学は学部生が25000人程度の中規模な大学で、蔵書は約600万冊、そのうち東アジア図書館で中・日・韓で40万冊のうち、日本語の資料はだいたい13万冊持っている。このグッド長橋広行さんが紹介してくださったのは、DDA と呼ばれる、日本ではわりとPDAの方がよく使われるかと思うんですけども、いわゆるデマンド・ドリブン・アキュジション、つまり要求に従って書籍を購入する。どういうことかという、まだ買っていない電子書籍、大学がまだ契約も何も、お金も何も払っていない電子書籍がその大学のOPACでヒットする。そのユーザがOPACで見つけた電子書籍をクリックして読むと、読んだところで課金がされると。例えば一定程度、一定の章とか一定の割合だけ読み進めれば何%課金されるとか、何人が読めば一冊分まるごと課金されるとか、課金された後はその大学図書館ではその電子書籍を一定価格ですつと読めるというようなものです。ただ、日本語の電子書籍も入れてはいるんだけど、日本の電子書籍は高額でかつ利用が少ないというようなお話もありました。しかも、英語の本はほとんどDDAにしちゃってるので選書の仕事が減ったと。ライブラリアンの本を選ぶ仕事が減って、その結果どうしたかというインストラクション、利用指導ですね、とかレファレンスの方に力を入れるようになったというようなお話がありました。そんな感じです。3人目が田中あずささん、ワシントン大学図書館のライブラリアンです。実は今日も来ていただいていますので、あとでちょっとだけお話し聞かせてもらいます。この方がいろいろ紹介してくださった中で興味深かった点は、多様性を何とかしていこうと、いろんな人種やいろんな年齢いろんなジェンダーのユーザがいてそのユーザに対してどれだけのケアをしていくことができるのかというようなこととお話ししてくださったと思います。あとは24時間のオンラインレファレンスというお話もありましたね。もう10年くらい前からたぶんアメリカではやっていたやつだと思うんですけども、24時間体制でチャットで時差を使って海外のライブラリアンに回答をやってもらうというお話があり

ました。あと学生によるライティング指導とかラーニングcommonsというようなお話もありましたし、向こうで就職する時のいろいろな苦労話とかというお話もあったかと思えます。それから4人目がバゼル山本登紀子さんですね。ハワイ大学マノア校の図書館の方で、この方も日本研究の図書館の方なんですけれども、アジアコレクションというところがあってそこに中・日・韓だけでなく各地域の専門のライブラリアンがいますというようなお話がありました。あと興味深かったのが、日本研究者による教授会のメンバーにバゼルさんがライブラリアンとして入っているというようなこともありました。それからワシントンDC、この方もともとワシントンDCのとある企業の研究所で情報を集めるというような仕事も過去にやってらっしゃったんですけども、日本資料を収集するのに非常に苦労したというようなお話がありました。特に政府刊行物を、当時80年代ですからまだネットじゃない紙のやつですね、その政府刊行物を集めるのが非常に日本の場合集めにくいというようなお話がされてたかと思えます。

というようなお一人おひとりの自己紹介がてらのいろいろなお話しを聞いた上でそれぞれの皆さんにそれぞれのテーマでお話をさせていただきました。ピッツバーグ大学のグッド長橋広行さんからは、アメリカにおける大学生の図書館利用行動についてお話しをしていただきました。これは2013年、2014年の調査 (<http://www.library.pitt.edu/other/files/pdf/assessment/MyDayAtHillmanSurveyResults.pdf>) を元にしたもので、アンケートで毎日来ると答えた学生が50%以上いるという、25000人の50%が毎日図書館来てる。しかもその2010年以前は学生の来館は少なかったんだけどなんか最近増えてきたんだよと。あとでまたご紹介しますが原因は分からないって言ってましたね。これちょっとあとで皆で話をしたいなと思えますけれども。しかもその使われ方をアンケートで調査すると個人で学習してる学生が圧倒的に多いんだと。グループ学習でたくさん使われてるのかなと思ったら、実はグループ学習はそんなでもないみたいだという、これもかなり興味深いお話がありました。いろいろなサービスがある中でよく使われるのがディスカバリーサービスと電子資料である。配布したレジメのグラフによれば、2つだけなんです、よく使われてるの。あとは全部ほぼ知らないかほぼ使っていないか。で、使われてるのが何かというとピットキャットというディスカバリーサービス、それからデータベースや電子ジャーナル、この二強ですね。あとはもう一生懸命頑張ってるインストラクションとかもあまり知られてないというお話でした。あと24時間開館をやっていると。このシンポジウムを聞いた学生の感想文で、多くの人が24時間開いているのが羨ましいって書いてましたね。それはかなり羨ましがられてみたいですね。しかも、午後11時から午前6時までの深夜の時間帯の週1回以上の来館者が30%。ほんとかなって思うんですけど、それくらいやっぱり好かれてると、というようなことが言われてました。もう一つ、これがハワイのバゼル山本登紀子さんにアメリカの研究者が図書館をど

んなふうに使っているかという調査を元に発表していただきました。どこから研究をスタートさせますかというアンケートをとったところ、回答で図書館内から始めるよ、つまり書棚の前に行ってブラウジングから始めるよっていう人が大きく減ったんだけど、最近になって図書館ウェブサイトや目録から始めるよって人が若干増えてきたと、というような非常に興味深いお話、ディスカバリーサービスを使ってるからじゃないかなというようなお話もありました。あと電子があれば冊子は不要であるかという問いに、イエスと答えたのが、雑誌では理系で80%がもういらないと。これびっくりしたのが、人文系でも50%を超えるユーザが雑誌は冊子でいらないと、電子だけでいいよと。書籍だと数字下がるんですけど、それでも書籍だと人文系の3割のユーザは紙はいらないよと言っているという結果ですね。図書館にとって重要な役割は何ですかと研究者に問うたところ、研究者のコメントとしては学部生のサポートをしてほしいというのが一番多かったというようなお話をしていました。これから図書館業界が一生懸命やっていくべきであろうと、今一生懸命議論してるデータキュレーションとかデータマネジメントについては、それは別に図書館はやんなくてよくて、研究者自身がやりたいんだよ、というような回答が9割を超えていたみたいな話もありましたね。というような調査結果を紹介してくださいました。ワシントン大学の田中あずささんから、日本人留学生がどんな勉強をしているかということと、その勉強している留学生に対して図書館がどんなサポートを提供しているかというようなお話をしていただきました。授業はものすごく課題が多いと。レポートもディスカッションもしなきゃいけないし、ディスカッションの司会もしなくちゃいけない。期末レポートは皆の前で発表しなきゃいけない、という学生に対して、ライブラリアンはその期末レポートのアイデアと一緒に考えてくれるサポートをしている。あるいはどんな資料が必要かという資料探しをアシストしてくれる、という紹介がありました。私はこれが一番興味深かったのですが、Japanologists Colloquium というのを田中さんが月に一度開くと。図書館に、例えば法学部とか政治学部とか文学部とか、いろんな分野の学部の学生の中から日本について研究している人たちを集めて、一緒に議論したり研究テーマを共有したり期末レポートの発表の練習をしたりというように、分野を超えた学生同士のコミュニケーションを図っている、というようなことを紹介してくださいました。あと学生の様子をハーバード大学のマクヴェイ山田久仁子さんが紹介してくれました。場としての図書館が好評であると。学習場所として使う。図書館で勉強しないんだったら代わりに寮のダイニングホール、食堂を使っていると。逆に言うとこれ図書館って寮の学食抜いてことですよ。あと図書館の書架でブラウジングをするということも重要でなくなってきたと。むしろデジタルへの期待値が高い。理系がオンラインで賄えるのは当たり前なんだけれども、遠隔地のハーバード大学、10キロくらい離れたところででっかい書庫を持っていて、その書庫に蔵書の



ほとんどを置いてちゃってるんですけども、その書庫にある図書を OPAC で注文をすると、その図書の何ページ目から何ページ目までをスキャンして PDF をメールで送ってくれるっていうサービスもあるんです。これは非常に羨ましいんですけども、学部生はそれすらもまどろっこしいと。なぜ今クリックして見れないんだと。まあそうですね、電子書籍が普及してるからそう思うのではないかなというような感じです。そういうことを紹介していただきました。

あとはフロアからの質問の時間ですが、日本の電子書籍プラットフォームでアメリカで使われてるのはなんですかという質問には、EBSCO であったり NetLibrary であったり丸善 eBook であったり JapanKnowledge であったりという答えでした。あとコピーについてはやっぱりアメリカのフェアユースがあるので緩やかだよというようなお話もあったかと思います。それから日本のデジタルアーカイブについて意見してくださいというような話では、visibility が低いと、そのサイトまで行かないと見られないというのは困るので、後で議論するようなディスカバリーシステムに日本のデジタルアーカイブのメタデータをちゃんと入れてくれて、そこでヒットするようにしてくれた方がいいんじゃないかなというようなお話があったかと思います。あとは先ほどのお話ですね、ピッツバーグ大学で学生の来館者数が増えた理由が分からないと。グループ学習よりどうも個人の学習場所の要求の方が多いように思うというのがアンケートでも結果として出ると。で、そういう個人の学習場所を確保するために開架資料の半分ほどをもう遠隔地の書庫に送ってしまっているというようなお話がありました。あとはワシントン大学図書館における多様性の支援については、ライブラリアンは図書館の情報学の修士号だけではなくて、それぞれの専門分野や能力を持つことが必要なんだよというようなお話があったかと思います。このシンポジウムの動画はアーカイブとして公開されています。

(<https://www.youtube.com/watch?v=-r4byVlaqqU>)

これを踏まえて、4人の皆さんに議論していただくというのが今日の趣旨です。1人1人短く、全体の感想をなんとなくで結構ですので簡単にしゃべってもらっていいですか？

久保山：はい、久保山です。そうですね、ちょっと補足しておく、大学図書館の入館者数の話がありましたけれども、本を自動書庫かな、遠隔地の書庫に送っただけじゃなくて、スタッフまで遠隔地に送ってます。私の記憶だと、この教室より一回り小さいくらいの大きさの部屋に東アジア図書館の、いわゆるテクニカル部門ですね、受け入れとか目録とかやってる部署があったんですけど、8年前は事務室だったところが、3年前に改装して、そこの人たちはバスで20分くらいの書庫がある建物に移ってます。というのが一つ補足ですね。感想ね、感想は難しいところがあるんだけど、やっぱりこう、

共通点と相違点というのはちょっとずっと意識してるところですね。まあこの話を聞いてふんふんそうだなとか、ここどうなんだろうって思って、いろいろ議論したいっていう、なんかちょっと共感できることも勿論あります。この話に出てこなかったこともたくさんあって、環境の違いとかいわゆる前提知識の違いで、まだ会話できない部分もきつとたくさんあるんだろうなというのは、まあ今回も改めて思ったというところです。なんかざっくばらんとか大雑把な話ですけれども、まずはこんなもんで。

今野：今野です。当たり前のことではあるんですけども、日本の大学図書館と共通する要素もあり、あるいは日本の図書館とはちょっと違う面もあるなあというのが私の感覚でした。で、具体的にじゃあどこが同じような感覚を覚えたかという、まあこれも正確な統計とかそういうものがないので私のあくまでも感覚的な話になるんですけども、やっぱり資料がどうしても冊子体、フィジカルなものから電子というものに流れていくという傾向、大きい傾向自体は、日本の場合はさすがにもうちょっと冊子を重要視しているような感覚があるんですけども、やはりちょっと電子の方にいくというふうな傾向はあるとは思いますが、で、そういった点は類似してると思うんですけども、一方で違う点があるとしたら田中あずささんのご紹介にあった、ワシントン大とかの学生支援とかですけれども、日本ではやっぱりどうしても図書館員があそこまで学部生相手にいろいろレポートの書き方の指導とかをやっているというのはあまり聞かないなというのがありますね。まあそういった点でやはりちょっと相違点と思える面と類似点と思える面がありました。以上です。

長坂：京都大学の長坂です。ちょっと今野さんが今言ったことと被るのですが、やっぱりよく言われることですけれども、アメリカのライブラリアンと日本の図書館員はそもそもその立ち位置として違うなというのがありました。教授会のところにライブラリアンが参加しているというのは、日本の感覚で言うとなんじゃそりゃって感覚ですけども、たぶん向こうからすれば、ライブラリアンはプロフェッサーなので、教授会に参加してるっていうのはそこまで珍しいことではないのかな、まあ論理的に理解できるというレベルの話なのかなあというふうに思いました。まあ、で、細かい違いを言っていけばたぶんいろいろそれでも多々あるのだろうと思うのですが、やはりたぶんそれでも日本がアメリカから学べる、逆に相乗効果で切磋琢磨できる場所っていうのはたくさんあるだろう、っていうのが私の感想です。

飯野：これまで皆さんが発言されたようにですね、やっぱり私としても相違点というところはすごく気になります。ただ一方でですね、例えば紙と電子の利用的な違いって

うのは日本とアメリカとではあるんですけども、ピッツバーグのところでの、グラフですね、利用行動ですね、これが僕としては結構自分で共感できるポイントがあって、そういったコンテンツの違いがあっても利用行動の理由は一緒なんだなあというのは少し思いました。

江上：ありがとうございます。皆さんのそれぞれのご感想を元にですね、大きく分けて最初にご説明した3つのテーマでちょっと議論していきたいなと言うふうに思っています。

まず最初はですね、ピッツバーグ大学のお話でもありましたけれども、学生がたくさん来る、まあ日本の大学も別に負けず劣らず学生さんいっぱい来てる、特にラーニングコモンズが最近あちこちで整備されて、ラーニングコモンズにもものすごく人が来てるというようなことは勿論皆さんも目にしているかとは思いますが。ではですね、その学生っていったい図書館に何をしに来てるのか、何故こっだけ図書館やラーニングコモンズに来てるのか。なぜ来館者数が増えてきているのか。いやそもそも増えていいのか、増えることが図書館にとっていいことなのか、という疑問を持つ方もいらっしゃるかもしれません。その疑問も含めて、学生たちはなぜ図書館やラーニングコモンズに来るのか、そもそも来るべきなのかということをお話しいただきたい。今パネラーの皆さんがそれぞれの答えをA3の紙にマジックでいろいろ書いてくれていますので、書けた方からそれを出してトークしていただくという、大喜利形式です。飯野さん書けたみたいです。飯野さんどうぞ。

飯野：私の個人の、今の職場の話なんですけど、まあなぜ来るのかという話ですが、本学の場合まずラーニングコモンズがないんですね、ないという環境下でまあちょっと話をしますと、今現状で把握している限り、図書館に来るのは紙の貸出とプラスアルファのためですね。紙の貸出と言える理由ですが、2009年くらいからかな、統計で貸出の状況、冊数と、それから入館者数というものを追いかけているんですが、実はこの数年間今日にいたるまで入館者数は毎年減っているのですが、一方で貸出冊数だけは増加しています。こういうことを考えると、本学の場合図書館に来る主要な理由のひとつはおそらく紙の貸出とっていいような気がするんですね。実際、図書館内で電子リソース用の端末を使うということが今の環境ではあまり考えられないところもありますし。ただ勿論自習をする人もいるので、そういった用途で来ている人も一定数いるかと思いますが、私の見ている限り本学では紙の貸出需要が高いのかなという気がします。

江上：だったら、いつまでも電子環境を整備せず紙という人質を確保し続ければ、入館



してくれると。

飯野：そこなんです。ただ一方で電子の利用は明らかに増えています。しかも、別に電子の利用が増えたからと言って紙の利用が減ったというわけじゃない。というのは、例えば OPAC とか横断検索とかディスカバリーとか、検索ツールは変遷してきましたけど、そういったものの検索回数は2009年、2010年に比べて去年は2倍ですかね、その位まで増えている。去年年間で120万回くらいの検索回数があるんです。2010年は60万回くらいだったんで、そう考えると2倍くらいは皆使うようになっている。しかもそれを通じて電子の全文コンテンツを使っているというのは統計上明らかなので、そういった意味では、まあ相乗効果なんですよ。

江上：紙も増えてるし、電子も増えてる。

飯野：電子も増えてますね。明らかに。

江上：佛大生はめっちゃ勉強してるってこと？

飯野：そうなるんでしょうね。ということは一応言いたい。

江上：ありがとうございます。たぶん似たような感じなのが、まず今野さんかな。

今野：私の感覚だと、私自己紹介でも今理系の専門図書館にいたと言いましたけれども、その前は文学研究科図書館にいまして、その文学部にあるような図書館ですね、そういう紙の資料が非常に多く置かれていると、利用者は紙の資料を使って例えば歴史学の研究をすると、そういうふうな人たちが中心の図書館でも働いていたことがあるんですね。大学図書館というのは、まあ図書館によるんで一概には言えないですけども、やっぱり大きい要素としては私は自習と資料の入手という目的が大きいんじゃないかなあという感覚がありますね。逆に言うと何があまり期待されていないのかというと、やっぱり例えばそのグループ学習とか司書の人にいろいろ教えてもらおうとか、そういうことっていうのはあまり、勿論ゼロではないんですが、期待されていないんじゃないかなあというふうなことも感覚的にはあるんですね。ラーニングコモンズとかできたりしてますけれども、やっぱり大学に入ってきた時に、学校図書館とか公共図書館といった別の図書館というものに対するイメージとかが形成されてる面も多いと思うんで、やっぱりそういうところであんまり皆でグループ学習をするというふうなものも、勿論最近増えてきては

いると思うんですけど、あまりそういうことがなくて、どっちかというと静かに1人でいられるものみたいなところがあったというのも、ちょっとまあ特に学部生の1年生2年生やとあんまりグループ学習とかそういうものにはいかない要因なのかなあ、というのは個人的には思っていますね。

あともう1点だけ、じゃあもう1つの質問はそもそも来るべきなのかということなんですけれども、私としては別に必要がなければ来なくてもいいんじゃないかというふうに思っているんですね。というのも、図書館というのが別に何も仕事もしなくていいと言ってるわけではなくて、非来館型サービスというものがあろうのではないかと。例えば京大においても、学内での複写物を図書館間でやりとりする場合とかは原則PDFで利用者の図書館システムの中にあるマイページみたいなのところにアップするという形で、来なくても複写物を閲覧できるというシステムを導入したんですよ。こういうふうにして利用者を図書館に来させなくしているということによって利用者のサービスも向上すると、そういうサービスのあり方というものもありますので、別に何がなんでも来てもらわないというふうな考え方は、ちょっと私は賛成できません。以上です。

江上：はい、ありがとうございます。

飯野：ごめんなさい、ちょっと1つだけ訂正。すみません。私さっき貸出冊数がずっと増えてると言いましたけれども、よく考えると2015年はちょっとだけ減りました。すみません。2014まではずっと伸びてきたということです。

江上：はい、ありがとうございます。今の今野さんの答えだったんですけども、学部生のサポートについては久保山さんが何か書いてますけれども、何か言いたいことがあるんじゃないですか？

久保山：久保山です。「学部生のサポート」の話の前に、特にここにいる学生さんの前提として確認しておきたいんですけど、入館者数というのは非常に便利な数字なんだけれども、それだけでは語りきれないよ、という前提を踏まえて今日話を聞いていただきたいと思います。当然施設の面積とか座席数とか開館時間とかあるいはキャンパス内の人口とかで変わりますので、そこは諸々あるんですけど、見やすいのでよく使われる、というのをまず一度理解していただきたい。若干否定的な言い方かもしれませんが、学生が図書館に来るのは勉強の場所を求めているのではないかしら、総体としてみた時にね。先日のシンポジウムの話でも、ハワイ大学の方でしたか、学部生のサポートが図書館に求められているという話があったかと思います。日本の大学図書館も学習支援だ教

育支援だというのが結構大きなトピックになっている。こんなこと言うと突飛がられるかもしれませんが、冷静に見た時に仮に数値化できるとしたら、図書館に来てる学生さんの目的はやっぱり勉強場所が大半じゃないのかな、というところは冷静に見ておきたい。ただ諸々の環境の変化とかがあるので学部生のサポートというのは考えていかなければならないということで、「学部生のサポート」に「？」を加えています。先週の田中さんの話で入館者数が年間500万人という話があったかと思います。この500万人がすごいかどうかという問いをたてたとすると、私の答えはイエスです。

江上：年間500万人がワシントン大学の図書館に来館していると。

久保山：はい。ちなみに同志社大学は2014年度今出川足す京田辺で100万人ちょっと、ラーニングコモンズがおそらく年間60万人前後ですかね。ラーニングコモンズの入館者数が年間60万人前後ということなんですけれども、でまあ図書館の数も違うので、単に500万人と100万人に満たないと、比較はできないんですけれども、数だけで言うとうそいうことになる。じゃあ何が違うのかというところで深めていかななくてはならないので、学生数だとか開館時間だとか、さっき授業の話も出ましたけれどもそこも違う、というところは踏まえておきたいなということです。とりあえず以上です。

江上：ありがとうございます。じゃあさっき今野さんが来なくてもいいというような持論を展開していましたが、そのさらに先を行くのがこの長坂さんのお答えですけれども、ちょっと持論をぶっていただけますか？

長坂：いえいえ、すみません、飯野さんのような数字に基づいた話ではないんですけれども、まず先ほど今野さんが言ったようにやはり来館者数という指標について。わざわざ忙しい学生さん、今の学生さんはものすごく忙しいですし、今の先生方もものすごく忙しいです。その忙しい中を縫って、来館しなくても実現可能な目的のために来館させるっていうのは、来館者数を増やしたい、来館者数が増えれば予算も増えるんじゃないか、みたいな図書館員のエゴのような思惑しか見えてこない。そのような状態で、その度にカウンターに来させるというのはどう考えても筋が悪いだろうと思います。田中あずささんも、図書館員の夢を実現するためじゃなくって利用者の夢を実現させるためにあるんだ、ということをおっしゃっていましたが、私もそれに同意です。ランガナタンだって利用者の時間を節約せよと言ったわけで、来なくてもいいサービスは来なくても提供できるようにしたい、というのが今の職場もそうだけれども、その前、さっき言った通り化学の図書室にいた時に実験に追われてる学生さんを見ていた私の感想で

す。ただ、一方で新しい来館型の図書館サービスというものとして、学部生の指導といったものがあります。あれはおそらく図書館がそうしているというよりは、大学自体が学部生への教育支援のサポートを厚くするっていう目的の中で、図書館もこういう役割を持っていく、もしくは先生方があんまり新しい仕事増やしたくないから図書館に押し付けられてるという可能性もありますけれども、そういった新しい役割を授業と連携してやっていくことで、結果として利用者が増えていくというのは極めて良いことではないかなと思います。

久保山：久保山です。長坂さんの話にちょっと被せると、私実は同志社大学の大学院生でもありますけども、とある日ラーニングcommonsでレポートを書きながらインターネットで入手できない資料があつて、チェック思いながら図書館まで歩いて行きました。このような事例がどれくらい一般的なのかはちょっとわかりませんが、そういう話だよな？

長坂：そうです。

久保山：だから図書館は別に資料を入手、今野さんが書いてるけれども、資料を入手する場所で、勉強場所から徒歩1分くらいのところにあればいいじゃんという考え方なのかどうかというところがまずひとつ。もうひとつは、私も勉強場所って書いたし、こちらでも自習っていうのがありましたが、キャンパス内で勉強できるのが図書館だけなのか、っていうのがそもそも前提として認識しておくべきなのかなと思います。

江上：勉強場所がいいんだったら、図書館じゃなくていいよって話ですよな？

久保山：うん、そこはやはり念頭に置いておかないとね。一方で、大学として勉強場所ってたぶん提供してあげないといけないんだろうけど、そこはよく分かんないんだけどね、私も。極論すれば、学生は家でも勉強するんだったら、別に図書館に大学として投資しなくてもいいじゃん、っていう問いは、私もちょっと答えはよく分からないんですが、井上さんすみません、ラーニングcommonsの責任的な方がいるんだけど、本当によく分からなくて、皆さんちょっと教えてください。

江上：それじゃあいいですか？ 井上さんにちょっと聞いてみましょうよ。井上さんどうぞ。今の若き、まあ若くもないけどもライブラリアンたちがこういうふうに言ってますけれども、同志社のラーニングcommonsって図書館と別のところにありますよね。お

おむね今のラーニングコモンズっていうのは大学図書館の中に作ってます。それを同志社大学さんでは別のわりと離れたところに作っています。その辺も踏まえて今の話を聞いた感想をちょっと聞かせていただきたいです。

井上真琴（同志社大学）：私は個人的な考え方として、学習とか学びとかがどういうものだったのかというのを一度見極めたかったので、ラーニングコモンズの中に本を持って行こうかという話在实际にあったんですけども、それだったら何が学ぶということの本質のところと繋がるかどうかというところが見えないので、一切持ってくるな、環境だけでどこまで勉強っていうものができるのかというところを見極めたい、というのがあって、途中の計画の段階で本は全部戻してやろうというふうなことになりまして、ラーニングコモンズを実際に作って、それ以降ずっとその様子を見ているわけなんです。例えばコンテンツが必要という考え方もありますけど、あちこち見に行っても、本使っている人を必死で探してるんですけどね、机の上に本が載っててもご自身の例えば公務員の試験問題集だったりしますね。ハードな勉強する人たちは結構ハンドアウトをたくさん持ってて、いっぱい下線の引かれたものを元にいろんな議論をしているというようなことも多いので、私はどうしてもコンテンツが傍にないとできないということにはならないんじゃないかな、というふうなことを証明できるかな、と思います。実際には複数人数に来てもらうために目的を特化したということがラーニングコモンズなので、ずっと、2年間かな、入館者の統計っていうのを見せてもらっているのですが、せっかくのラーニングコモンズなのに全く一人で来て勉強をしている人が1割います。

江上：でも1割だけなんですか？ 逆に。

井上：はい、だから9割の人は1人の時もあるけれど、2人以上、3人以上でここで勉強したことがあるという数字は出ています。そうしたものをずっと追いながら今後どういうふうに考えていったらいいのかなというのは、皆さんと一緒にまだまだもやもやした中考えているところなんです。ただこないだのアメリカの人の話を聞いたら、本を書庫に入れて閲覧スペースというか勉強スペース作ったら、いっぱい来たっていうわけですね。じゃあいったい学習に対して図書館っていうのは何ができるのかっていうのを、もっと真剣にみんなで考えてもらった方がいいなっていうふうに思っています。

江上：ありがとうございます。ごめんなさい、いきなりふって申し訳ない。私の考えを言っても大丈夫ですか？ 皆さんおっしゃってること分かるんですよ。井上さんが今さっきおっしゃったことも分かるんですけども、それを踏まえて私が思うのは、文献を参



照せずに勉強するのって、それサイエンスか？て思うんです。それサイエンスじゃないんじゃないの？サイエンスやるんだったら文献見ないとだめじゃないの？って思うんですよね。文献なしでグループだけ組んで勉強するのだけだと、どうかなって私はちょっとと思います。

長坂：単純な話で、文献はパソコンの画面の中にあるだけのことでしょ。

江上：だから電子資料が整備されれば、もっとそういうことになっていくわけですか。

飯野：まあ極論じゃないですけども、うちとかの場合は通信教育課程の学生さんも多いんですね。で、通信教育課程の学生さんっていうのは当然普段は図書館に来られないので、昔から紙の本を「送本貸出」したりだとか、学内の文献に関しては複写して送ってあげたりということをしてきたわけです。別にそれでも、ILLじゃないけど、時間はかかるものの文献を手にとることができなくはない。でもその上でこうやって電子化が進んでくるということを考えると、時間的な制約もなくなるわけで、図書館に来なくても、自分なりの環境も含めて、より良い勉強の環境が構築できるという気がしますよね。

江上：じゃああとは、来館者数が減っても評価がそれによって下がらないような、評価指標をこれからちゃんと作らないといけないと、そんな感じですよ。

久保山：久保山です。さっき井上さんの話で資料を使っている人があんまりいなかったということで、私大阪大学で3年か4年前にうちのラーニングコモンズで1週間くらい学生にインタビュー調査とかしたことがあります。私も先入観としてラーニングコモンズで本を使ってないじゃんというような感じで、その調査に臨みました。そして、ラーニングコモンズのいいところってどんなところ？ってオープンで質問したんですよ。開館時間中に突撃インタビューしたんですけども、大雑把に言うと2割から3割の人が、そこに書庫あるからとか本が近いから、という答えがその時はありました。そういう答えを見ると、意外と本見てるようなことが目に入ってきたりするので、使われ方っていうのは結構いろいろあるので、ちょっとあとでちゃんと調べたほうがいいんじゃないかなとは思っていますね。

今の話良かったけどちょっとひとつだけ脱線すると、さっき僕が図書館がキャンパスの中に学習場所を用意するかどうかってことを聞きましたけど、まああった方がいいとは思う。特に学生の皆さんは、そういう学習場所のデザインっていうのはどういうものなのかっていうのは意識してほしいなというのは思います。長くは話せませんが、机

の大きさとかライティング、照明とかですね、壁の色とか、じゃあこの机の色はなんでライトブラウンなんだとかね、そういうことも考えて、図書館なり大学なりの学習環境っていうのは見て欲しいっていうのは、ちょっと脱線ですけど思います。だからさっきの学習サポートの環境っていうのは大事ななと思います。

江上：そうですね。だから場の提供をするんだっていうんだったら物理的な問題をちゃんと考えないとですね。ありがとうございます。

じゃあそろそろ2問目いってもいいですか？ 2問目のお題がこちらですね。ディスカバリーシステムが使われ出して研究活動やら学習活動が変わったんじゃないか、そのヒントになるようなお話もアメリカのライブラリアンの皆さんからうかがえました。ディスカバリーシステムというものがどんどん使われ出してきたと。そのユーザたちの前で司書たちはいったいどんな役割を果たすのか、何をして過ごすのかというようなことを、司書の役割の変化という目線から考えていただきたいと思います。

この時間を使ってディスカバリーシステムとは何かっていうのを飯野さん、ごく簡単に全然知らない方に説明してもらってもいいですか。実は飯野さんはい最近ディスカバリーシステムに関する本を出された、日本で初めて本格的に日本の大学図書館にディスカバリーシステムを佛大の図書館に導入したという、日本の中ではディスカバリーシステムの第一人者でいいですよ？という方です。お願いします。

飯野：飯野です。ディスカバリーサービスと今言ったんですけども、正確に言うとディスカバリーサービスにはいくつかあって、私がやったのはウェブスケールディスカバリーサービスというものなんです。どういうものかっていうと、簡単に言ってしまうと、昔でいうところのたくさんのデータベースなどを横断的に検索するシステムです。ただし横断検索とか統合検索とか昔いろいろあったんですが、それは今のディスカバリーサービスとは全然違って、今のディスカバリーサービスと呼ばれているものは、各データベースの中からあらかじめデータをもってきています。もってきて自分の中に格納して、そこに検索をかけるシステム。だからグーグルの、変な話ですけども、学術情報版のようなものだとお考えいただければと思います。

江上：ありがとうございます。そんな感じですよ。だいたいわかりましたかね。先ほど見たピッツバーグ大学の例で、学生にたくさん使われているものが2つあると。1つはディスカバリーシステムであり、もう1つは電子ジャーナル・電子書籍であるということを書いていましたけれども、あのディスカバリーサービスの中にはいわゆる図書館のOPACも入ってるんですよ。だから、図書館のOPACも使われているし、ディ

スカバリーシステムとしても使われてるのかなと思います。

さてじゃあ皆さんにディスカバリー時代における司書の役割の変化みたいなことを書いていただきました。テクニカルな問題から先に行きましようか。長坂さん。

長坂：はい。たぶんさっきの質問よりも今回の方がある意味保守的な考え方をもとに回答しています。ディスカバリーに関して喋る時にここまで保守的なタイプはいないと思います。ディスカバリーという新しい検索システムが出てきました、という時に、既存の目録業務は、ディスカバリーで検索しやすいようなデータを作れるようにならなければならぬ、というのが私の考え方です。というのは、実はちょっと前に、学生さんから見たらちょっと前じゃないと思いますが、CiNii Books ができました。それまでNACSIS-WebCat というシステムがありました。CiNii Books を初めて見た時に、たぶん図書館の人は分かると思うんですけども、学生さんは分からなかったらごめんなさい。著者名典拠が上の方、タイトルの次くらいに表示されていて、リンクがある典拠とない典拠があります。これを見た時に、著者名典拠の作り方はもう今までの考え方とがらっと変えて、それこそ絶対に作らなきゃいけないようなものになったと感じました。ディスカバリーに関してもやはり同じことがいえると思います。そのうちの1つ代表的なものをあげるなら、ディスカバリーサービスって左側のところにファセットっていうのがあって、検索とかができるようになっていて、例えば件名、テーマごとにですね、何とかがってキーワードで探したやつのうち化学に関する本だけを探したいっていうのを引っ張り出せる、それを抽出できるようなシステムがあるんですね。しかしそれをやるためにはももとの目録の方に件名、サブジェクトが入っていないといけません。それを、実はサブジェクトって大学図書館員あんまり、すごいカタログガーは別ですけど、普通のカタログガーレベルだとあんまり得意じゃないんですね。たぶん日本でまともにサブジェクトヘディングを組織として書誌に付与できるのはNDL、国立国会図書館さんとTRCさんだけなんじゃないかなというふうに正直思います。そういうふうに検索するのに必要な項目、つまり目録を作る上で必要な項目っていうのが変わったのであれば、ライブラリアンの専門性というのもやはり変わらなければならぬだろう。それはユーザが使いやすいような、検索する時に使いやすいようなやり方に変わっていかなければいけないだろう、と考えています。

江上：はい、ありがとうございます。まあそうだなって思います。久保山さん、次いいですか、デザインの話を。

久保山：久保山です。ひとつ目に、分かりやすいデザインというのを書かせていただきま

した。いろんな意味があると思うんだけど、私が強調したいのは、見た目に使いやすいものを今日の文脈で言うと、ライブラリアンの皆さんも意識していただきたいなということです。もちろんディスカバリーサービスっていうのはベンダーさんがデザイン、開発されているやつで、まあそこそこ使いやすいものになっているんだけど、これまで図書館の情報リテラシー教育っていうと、ツールの使い方みたいなものが割と多かったっていう印象を持っています。ただ、デザインをちょっと工夫するだけで使い方を教えずともいいし、このボタンを押してくださいねと言わなくてもいいだろうし。というところでは、まあ頷いてくれてる人もいて嬉しいんだけど、なんかその業界のコモンセンスにまで至ってないような気がするんで、若い学生さんはそういうことを意識していただきたいと思う。同志社大学のウェブサイトの悪口言ったらいけないかもしれないけれども、個人の見解としては、サイト内検索が一番上に出て、僕がよく見る画面の大きさだったら蔵書検索、DOORSの検索ボックスはスクロールしないと見えないんですよ。もちろんその検索は後でいいよという思想で作っているんだっただけでも、DOORS使ってほしいんだっただけでもDOORSの検索ボックスをもう少し上に持ってきた方がいいんじゃないかなとか、例えばそういうことをもう少し多くの人が意識しないと、使いやすいものはできないんじゃないのかなと思います。

江上：ありがとうございます。じゃあ今野さんに、飯野さんはもう大トリとして後でじっくりうかがいますので、今野さんよろしくお願いします。

今野：私は皆さんと違ってまして、まずディスカバリーサービスっていうのは私が思うにたぶん欠点が多いというふうなことがありますて、その欠点についても伝えていくっていうのが、ディスカバリー慣れしている利用者に対して何かできることがあるとしたら、それなのかなという気がするんですね。例えばディスカバリーももちろん万能ではなくて、その構造上業者と契約してこのデータベースにあるものは捕捉できるとかそういうものを当然としていくわけですけども、一番分かりやすいものなら歴史学だと思うんですけども、近現代の歴史を研究するとかいう時に、ディスカバリーでヒットした文献情報でその文献を見てそれだけで博士論文が書けるだろうか、っていうとまあたぶん無理な場合もあると思うんですね。それで結局だから一次資料とか人と喋るとか、そういうオーラルヒストリーの研究とかインタビューとかアンケートとか、そういうのが必要になってくるだろうとかいうこともありますし、あるいは今のディスカバリーサービスだと写真とか音声とか画像とか映像とかそういうものにヒットしないとかいうこともありますし、あるいはヒットしすぎてしまうということが一方で逆の話としてあると思うんですね。このディスカバリーサービスというデータベースを使うよりも、別

のデータベースを単体で使った方が合理的であるとか、速いとか、そういうことも当然あると思いますし、だから例えばグーグルで7万件ヒットして、ディスカバリーサービスで4万件ヒットして、OPACで200件ヒットすると、どのデータベースを使うのが一番合理的なのかというのは、やはり状況によることもあると思いますし、そういうふうなディスカバリーサービス以外の情報検索の手段というものの合理性というふうなことについても伝えていくというのが、やっぱり1つの方法なのかなと私なんかは思います。以上です。

江上：それはやっぱりディスカバリーシステムではカバーできないということですかね？

今野：そうですね。ディスカバリーサービスをなんでもかんでも使うというのがいいかどうか、ということですね。例えば私の知人で今年の4月に京大生になった人としゃべっていると、18歳の男の子なんですけれども、ディスカバリーサービスってあれはいったいなんなんですか、気持ち悪いんですけど、とはっきり言われたんですね。彼は高校の学校図書館と公共図書館しか利用したことがないと。そうするとウェブ上のOPACというものは当然所蔵しているものだけがでてくる。もちろん今、京都府立図書館とか、それじゃないものも入ってますけど、基本的にほとんどの場合、所蔵しているものが出てくるというのがOPACであると。で、ディスカバリーサービスで出てくるものを見ると、京大が持っていないものがバンバン当然大量にヒットしてくる。それを見ると何とかいうかちょっと気持ちが悪いとか、そういうふうなこともあるわけですし、結局京大にある本を借りてじっくり読もうというふうになった時に、ディスカバリーサービスというものがあまり合理的でないということもあるし、一方でそういう人にディスカバリーサービスの使いこなし方をももちろん教えるということは大事だと思うんですけども、そういういろいろ難しい問題をはらんでいるんじゃないかと思います。

江上：それについては飯野さんがもしかしたら何か言ってくれるかもしれない。飯野さんお願いします。

飯野：すみません、何かお願いとか言われちゃったんですけど、皆さんの言っていることが僕は非常に面白かったです。というのは、僕は今ここに「利用者支援」というのを書かせてもらったんですが、これは何かというと、幻想を抱いている人がいっぱいいて、その人たちへの対応が必要ということなんですね。幻想って何かというと、ウェブスケールディスカバリーを使えば何でも検索できて、なんでも自分の欲しいものがグーグルみたいにピンポイントで一番上に挙がってくるだろう、って思っている人たちがいるんで



すよ。これ現実にね。学生さんとかいっぱいいます。で一方で、先生とかで、先ほどおっしゃったように、いろんなものが挙がってきて気持ち悪いから使いづらいという人もいます。だけど、これがよく考えると、なんとというか幻想が邪魔をしているんですね。というのも、ディスカバリーサービスって実は簡単なサービスではないからなんです。僕、実はそのことに気付くまでにずいぶん時間がかかったんですけど、やっぱり先ほどファセットというのがあるという話をしたけれども、見たことがない人はファセットっていったいなんやねんと思うでしょうし、ファセットって初めて聞いたという人もいっぱいいてと思うんです。で、簡単にいうとファセットっていうのは、絞り込みをするための機能なんですけど、こういったものが、実は、ディスカバリーの画面の端っこに出てるんです。グーグルだったらそれはないですよ。なので、これを使いこなすとかいう発想をまず最初に教えてあげないと、うまく使えないということになっちゃうんです。あるいはそのファセットというところに出てくる項目で、先ほど言っていたように件名というのがあります。これはそれに関連するものを絞っていくものですけども、そういうところを充実させていくと、それによって自分の欲しいものというのをちゃんと絞り込めるようになってきたりする。これは僕、ここに書いたんですけども、キュレーションという形で、必要な情報をこちら側がデザインするという、そこに繋がるんだと思います。で、おそらくこのディスカバリーサービスが今後普及していくときには、そこに含まれて表示されるデータに対するデザインがたぶん必要になってきます。その現れが、先ほどの件名であり、それからもちろん画面上のデザインでもあると思います。とにかくそういったものを含めて、何かこのお三方がいていたことが、すごく僕が言いたかったことに近かったの、すごくありがたいなと思ったのです。まあそういった利用者支援としては、利用者には使い方を、それからデザインの部分ではキュレーションをする。それからもう1つ、もっとたくさんの利用者の要求があるのであれば、それに応じたデータベースを取ってくる、入れる、そういったベンダーに対するアプローチをしかけていく。たぶんこういったことが必要になってくるのではないかという気がします。

江上：ありがとうございます。今のお話で質問とかコメントのある方どうぞ。できれば学生の方に何か言ってほしいなと思うんですけども、いかがですか。

飯野：ちょっと質問なのですが、学生の方は同志社のディスカバリーって使ってはるんですか？ どうなんですか？

江上：えーと、まず学生の人全員手を挙げてみてください。その中でディスカバリー使っ

ている人はそのまま手を挙げたままで、使っていない人はおろしてください。(ほとんどが手をおろす) あれ! これは誰に文句言ったらいいんですか。

学生：ディスカバリーシステムって、同志社ではなんていうふうに呼ばれているやつかなと思って。

江上：ディスカバリーシステムが何かわからない。

久保山：「DOGS Plus」

学生：あ、使った事あります。

江上：はいじゃあ DOGS Plus だったら使ってるよという学生の人、ハイ。それでも挙がらないですね。(3分の1くらいの学生が手を挙げる)

飯野：あの、使っていない方がたぶん多いんですけど、率直に、それはなぜ?

江上：使っていない理由はわからないんじゃないですかね。

飯野：なかなか難しい質問でした。すみません。

江上：でもそれは佛大でも、学部生の方がそんなにがつつり使っているかという、日本語のコンテンツが収録されていないんであったら、学部生にはやはり敷居が高いんじゃないですか。

飯野：そこはちょっとよくわからないんですけど、今のところ現状じゃあどのくらいの割合かざっくりいうと、OPAC とディスカバリーは3 : 1 です。

江上：OPAC が3、ディスカバリーが1。

飯野：25%くらいです、全検索の。なんで比較的使っているとは思いますがね。

今野：そうするとやっぱりなんだかんだで欠点があるっていうような、結局、調べ方が上手くない人がやると大量にヒットしてしまって、宿命として、これ図書館学の授業で

絶対習うと思うんですけど、絶対大量にヒットするとバズが多く含まれると。で飯野さんがおっしゃったように、今回のご質問とはずれていってるんですけども、マスターした人とディスカバリー慣れした人やったら適切に検索できるだろうということなんですけれども、それは一方で今、飯野さんがおっしゃったように、難しいと。図書館員はともかく普通のユーザですよ。図書館学とか図書館に興味ないと、私は別に、というユーザがやろうとしたら難しい、という欠点があると思うんですが、いかがでしょう。

飯野：そうですねえ、実はうちではわざと名前を「お気軽検索」という名前にして、初心者に「お気軽」に使ってもらおうというコンセプトでやったところもあるし、それから図書館のポータルサイトのトップページのデフォルトの検索エンジンをお気軽検索にしてるんですね。そういった中で確かに図書館に来ている人の状況を見てみると、結構それでもがんばって使っている人はいるかなという感じです。ただ僕がちょっとわからないのはバグが多いと言うところなんですけど、それは何かリンクが切れているとか、そういう？

今野：バグじゃなくてバズ。図書館用語なんですけど、ここにいる人は大丈夫ですかね。自分が求めてないクズ情報って言うか、そういうものです、はい。

飯野：というところでいうと、その辺のところの感覚が初心者にあるのか、正直僕はちょっとわからない部分もあります。自分で使っていて確かにこれじゃないのがひっかかった方がいいのかなということもあるんですけど、ただそういったものは例えばデータベースレベルであればある程度調整はきくので、まあそういった依頼を出したりは当然するし、そういった部分でそれも図書館の新しい仕事かなと若干思ったりしますね。

江上：ライブラリアンとしてはそういう仕事が新しい役割になっていくんじゃないかな、というような話ですね。

長坂：京都大学の長坂です。実は京都大学の OPAC を見たことがある人は京都大学のこの2人とかあとごく一部だと思うんですけども、タブで検索が切り替えられる。一番左のタブが「蔵書検索」で OPAC。その次が「論文検索」って名前のタブがあって、その次が「図書・論文+」っていうタブがあるんです。で、「図書・論文+」というのがディスカバリーサービスなんです。じゃあ「論文検索」って何かって言われたら、ディスカバリーサービスを最初から論文系の資料種別に絞ったディスカバリーサービスなんです。実は今までもともと論文検索って名前でディスカバリーだったんですけど

も、論文じゃないものがいっぱいヒットするじゃないか、というさっきの今野さんのお友達の方が言ったような意見を受けて、じゃあ論文だけヒットさせてやろうと思って、論文だけヒットさせるためにはどんな URL を組めばいいのかというのをガタガタずっとパソコンに向かっていろいろ試してみたら何とか見つかりまして、やってみただすけれども、ディスカバリーサービスの本質としては極めて変だと思わなくてはダメですけども、論文検索っぽくはなかったかなと思っています。結果がどうだったかは統計とか見ていないのでまだわかりません。

飯野：なるほどそういう使い方もあるのかと思って聞いていたんですけども、でもちょっと今僕が思ったのは、ディスカバリーサービスって名前が意味するように、やはりディスカバリーをさせないといけないと思うんですよ。例えば今までのシステムって、あの OPAC はパブリックアクセスカタログで、アクセスをさせることが重要だったんですよ。で、統合検索のときにはフェデレイテッドサーチっていう形でサーチが重要だったんですよ。でも今回のはディスカバリーサービスっていう形なので、見つけた後のものからどういうふうなディスカバリー、つまり発見を導けるかというところが本質だと思うんですよ。ということはそれを導くための手伝いを図書館はやっぱりしてあげなくちゃいけないので、やはりデザイン的なものとか、それから先ほどさんざん皆さんが言ってらっしゃった情報ですよ、ディスカバリーに合った情報をどう作るのかとか、そういったところに目を向ける必要があると思うんです。とにかく、僕らはそのシステムというサービスがディスカバリーというのをメインに押し出しているのであれば、そこに合った行動をとって、それを使いこなせるようにしてあげないといけないんじゃないかなという気はします。

江上：ありがとうございます。さすがやっぱり飯野さんが言ってくるとピシャッとしまるといふか。この話は、これだけで2時間いける話でしたね。

とりあえずフロアから特になければ、次の3問目にいきたいと思います。これもざっくりとしたお話ではあるんですけども、日本とアメリカの違いについて先週のシンポジウムで語られていたかと思います。特に日本の電子資料、電子書籍とか電子ジャーナルとかデータベースとかっていったものや、最近大学や図書館や公的機関が構築しているデジタルアーカイブと呼ばれるものがありますけれども、なかなかウェブで国際的に存在感があがっていかない、という問題が常に指摘されます。日本の電子資料やデジタルアーカイブ、どこがだめでどうしていけばいいのだろうか、というようなところを書いていただけたらなと思います。まず今野さんからですね。どうぞ。

今野：めちゃくちゃシンプルな話で、まあ一言で言うと電子化されないことと、それから先週の話でもありましたように見つけにくいということなんでしょうね。電子化って言いましたけど、もはやそもそも世界的にはポーンデジタルという言葉を使いますけれども、電子化というとか紙であるものを電子化するっていうような話ですけども、そうじゃなくてそもそも電子でしか出てないと、紙なんか出てないというものも多くあると思うんですけど、そういうのが日本では全然進展してない。そしてまたあったとしてもたしかに検索しにくいと、存在が周知されてないと。これは電子化の問題というか検索システムの問題なのかという気もしてくるんですけども、そこが問題ということがあるとは思いますが。

江上：見つけにくいっていうのは？

今野：例えば先週でも日文研のデジタルアーカイブがあんまり見つけにくいっていうんですかね、サービスが周知されてないと、認知度が低いっていうふうなことも一つの欠点であろうとは思いますが。

江上：日文研のデータベース、いくつかいろんな種類のデータベースがあって、問い合わせがよくくるデータベースと問い合わせが全然来ないデータベースとあります。問い合わせがよくくるデータベースっていうのはもうこれは間違いない、例外なくグーグルで直接ヒットする。それについては必ず電話がきます。グーグルでヒットしなかったデータベースが最近グーグルでヒットするように改装されました。問い合わせがやっぱり増えました。明らかにそれは全然違うと。やっぱり見つけやすい・見つけにくいっていうのはあるかと思います。ありがとうございます。飯野さん、いいですか。

飯野：どこがだめなのかって言うのはなかなか難しいですね。でもあちこちの大学や公立の図書館が作ったデジタルアーカイブを見に行くんですけど、たまにですね、ここ数年全く更新されていないような、打ち捨てられてしまっているようなものとかがあったりします。これ非常にもったいないですね。あとは、ちょっと先ほどの江上さんの話にも近いかもしれませんが、データ流通がちょっといまいちのものが多いかなという気はします。例えばグーグルで検索できるというのは本当に大切に、うちもグーグルでなるべく引っかかるように、デジタルコレクションという形でこういったアーカイブを公開していますが、公開して以降、マスコミからの問い合わせとかいろいろ美術館さんの方からこれを貸出してほしいというような申し出とかがやっぱり来るようになりました。そういう意味ではこれはやっぱり役に立つんだと思うんです。ぶっちゃけ言うと広報の



役に立っているんですよね。佛教大学にこんなのあるんやっていうのが、SNSなどで囁かれたりすると特にそう思います。とくに洛中洛外図屏風を公開した時は結構インパクトがあって、あちこちからウェブ上でいろいろ研究されたりとかもしたんですけど、やっぱりそういったこともまず必要だと思うんです。

ただ一方で、先ほどの私の話に戻るんですけど、ピッツバーグ大学とかアメリカで、今ディスカバリーを入り口として日本の学術情報の収集に使っている人たちがいる。そういった先生とか学生さんとかの検索に、こういったものがヒットしないってなると、やっぱりそれは損失だと思うんですよね。ちょっと私の調べたところで恐縮なんですけれども、例えばアメリカでディスカバリーサービスを使って枕草子を検索をしたりすると、検索結果の上位ほとんどが中国語の文献だったとか、そういう事態が実は生じていたりします。日本のアーカイブのものは検索結果に出てこないとかいうことも珍しくない。こういったことはやっぱり日本の文化というものを発信するという意味では損失なので、そういったものにどういうふうにしてアーカイブのデータを載せていくのか、ということが今後の課題なのかなという気はします。

江上：ありがとうございます。先ほどの振り返りのところでも見ましたが、ディスカバリーシステムに日本のデジタルアーカイブのメタデータを載せて欲しいと、送って欲しいというようなお話もありましたし、そんな感じだと思います。ありがとうございます。久保山さん、書けましたか？

久保山：ちょっとね、フォーカスが絞りにくいなあと思って。まあとりあえずいきます。とりあえず…。久保山です。「図書館システム（ウェブ）上の扱い」、とちょっと広いことを書いてしまいました。電子資料とかデジタルアーカイブっていうお題で、今出てきたのはいわゆるデジタルアーカイブ、図書雑誌とは違うところだったので…。まずそっち（デジタルアーカイブ）の話をする、私自身はそちょっとそんなに強くないので、自分自身の課題でもありますけれども、日本の図書館で働いている方がそういうものを一体どう扱ったらいいのかということに知識がそんなにない。同志社大学の司書課程の批判をこんなところでしませんけども、どういう教え方をされているのか。現場のスタッフはどういうかたちでそれを覚えていくのか、っていうところではやっぱり課題であるなど。もうちょっと図書雑誌の話に引き付けた話で言うと、電子ブックっていうのを思い出した時に、電子ブックが図書館システム上どういうふうに使われるのかっていうのは、まだまだぶん業界的に定まってないんですよね。いわゆる OPAC で探せるのが京大図書館さんなのかな。大阪大学図書館さんはたぶん検索できなかったと思うんだけど、標準的な扱いがたぶん決まっていない。違いはあってもいいんだと思うんだけど

も、ある程度標準化しとかなないとスタッフ側も覚えられないし、使う側も京大から阪大に進学した人はたぶん混乱するかもしれないかなと思います。

江上：今は、売りものの電子書籍、売りものっていったらあれですけども、お金出して買うタイプの電子書籍とか電子ジャーナルの類の話ですね、それを図書館システム上で上手く動かすっていうのは、という話をしている。飯野さんの先ほどおっしゃっていた、ディスカバリーシステムに日本語のコンテンツがうまく上の方にヒットしてくれてないっていうのも、言ったらそのデジタルアーカイブの問題というよりは、購読ものの電子書籍や電子ジャーナルがうまく収録されてない、契約されてない、その辺ですかね。

飯野：そういうことですね。ぶっちゃけ言うと日本語のそういった電子コンテンツのそもそもメタデータが流れていっていない。ディスカバリーに収録されていないっていうのは実は大きな問題であるような気はします。

江上：先週のシンポジウムでの、日本の電子書籍のプラットフォームは何を契約してまわかっていう質問、あれ長坂さんの質問でしたよね。で答えてもらったのがEBSCOとNetLibraryと丸善eBook。あとJapanKnowledgeも契約してればそこに載っている電子書籍がありますよ、というような話をしました。日本語の電子書籍って今こんなもんですか、最近増えてます？

飯野：数万冊ある。たぶん丸善さんとかは3万近いですよ。

江上：それだけ入ってれば、それはディスカバリーシステムに入ってくれてればヒットするはずだと。

飯野：それだけではちょっと違うと思いますね。というのは、それに適したメタデータっていうものができてない。ディスカバリーとかもそうですね。それから電子ジャーナル関係のもののメタデータも流れていない。これは大きい話だと思うんですね。

久保山：質問なんですけど、電子ジャーナルのメタデータって流れてる印象があったんですけど、実はそうでもないんですか？

飯野：正確なこと言うと、流れてはいるんですけど、十分ではない。何が不十分かとい

うとメタデータの質という点で、例えばアブストラクトとか全文テキストデータとかが不足している。もちろんジャイロとかからアブストラクトのついたメタデータが、少しは流れてきますけど、基本全文テキストデータはない。それからサブジェクトとか、著者キーワードなどの数が足りないとか、こういったものがじわじわと影響しています。アーカイブの話に戻っちゃうんですけど、日本語のメタデータの内容とかを観察していると、いろいろとやっぱりアブストラクトとかそういったものの数が不足しているせいで、ディスカバリーで検索した時に上に挙がりにくい。これが1つ、大きな問題点ですよ。それから、もう1つは全文のテキストデータなどが公開されていないものが多いので、それも検索時の優先順位を高めるといふ点では、アルゴリズムの点でなかなか苦しい。あとはもう1つは、これは何て言ったらいいんですかね、例えば人文社会系の電子ジャーナルをまとめて提供するような「有償」のプラットフォームがないというのが問題。というのも、実はディスカバリーサービスって自分たちが使っているデータベースのスイッチを入れないと、そのデータを検索できないんですよ。そういった中で、例えば国立国会図書館の雑誌記事索引とかあるんですけど、あれ無料なんで、自分たちがそれを購読している意識がないので、スイッチを入れなかったりするんですよ。

江上：お金払ってないから別にいいやと。

飯野：そう。そうするとそもそも検索結果として挙がらない。ところが例えば韓国とか中国とかは、例えば中国とかはサイト CNKI とか、ドラゴンソースとかありますよね。韓国で言っても KISS とか、DBpia とかかな、そういった「有償」の電子ジャーナルの提供サイトがある。そうすると図書館員も意識して、そのスイッチを入れるので、中国や韓国由来のメタデータがバーンと入ってくる。そういった中で枕草子を検索すると中国語の検索結果しか挙がらないというのは仕方ないけれども、やっぱり問題かなって気はします。

江上：オープンアクセスっていうけど、オープンにしてアクセスされるのかはまた別の問題だなんてことですね。アクセスされやすさとオープンとは全く別関係。

飯野：そうですね。アクセスされやすいものとオープンなものっていうのは完全に別なのかな、っていうような気はします。

江上：ありがとうございます。そして長坂さん。

長坂：はい。私の興味は主にカレントの、今出ているものに対してあります。今出ている和書の電子ブックというと、さっきから話に出ている通り、丸善さんの Maruzen eBook Library、紀伊国屋さんの NetLibrary、それから JapanKnowledge Lib などがあるのですが、それを大学図書館側はそもそも買ってない、というのがとにかく最大の問題。これは当然利用者に提供することができないというのものもあるし、買う人がいない以上電子化する必要を出版社が感じないという、2つの問題、両方について言っているつもりです。聴衆に書店の方がいらっしゃるんで、ここにカモがいますよって言うようなものなので、ちょっとあまり言いにくいんですけども、そうですね、基本的にはやっぱり大学図書館が日本の大学図書館向けの電子ブックを買わないのであれば、そりゃ誰だってもうこれ以上電子ブックなんか作る人はおらんやろっていう。日本の出版社っていうのは基本的にポーンデジタルではない、あくまで紙がメインであって、紙を出版した上でその版下データを使って電子ブックを作っているようなもので、電子ブックを作ろうと思うと別に手間がかかるんですね。全く別の手間がかかる。だからそれをわざわざやって、わざわざ紀伊国屋さんだったり丸善さんだったりに卸して、にもかかわらず日本の大学図書館は買ってくれない。機関向け電子ブックを買う人は図書館しかいるわけないのに。それを海外のアメリカの日本研究ライブラリーに任せるっていうのはどう考えても筋が違う。

江上：マーケットのでっかい日本でそれを買わないといけない。

長坂：そうです。日本語の本なんだから、日本の組織しか基本的には買わないんだから、日本が買わなければならないだろうというふうに考えてはいます。先日国立国会図書館のカレントアウェアネスに、丸善の Maruzen eBook Library をさっきちょっと話が出た DDA、Demand Driven Acquisition の形式で購入するという実験を、横浜国立大学と千葉大学とお茶の水女子大学の3大学共同で行った、という記事が出ておりました。こういうようなかたちで、日本の大学も日本の電子ブックというのをニーズにちょっと先立つかたちでもあるんだけど、積極的に導入していくというのが、今後の日本の学術流通、日本語文献の学術流通において必要ではないかなと考えております。

江上：久保山さんがさっきから何か言いたそうにしているんですけど、はい。

久保山：あえて反論しようかなと思ったんですけども、最後に DDA の話が出たもので、最後の話をちょっと促進するようなコメントをします。まず、あえて反論しようと思ったのは、皆さん1つ目のところで、図書館使うのって資料を使いに来るから、って言う

てたじゃないですか。私はまあ図書資料費の予算配分のまあ元締めではないですけども担当してますけれども、じゃあ周りにもしくは上司に「電子ブックの予算どうする？」て聞かれたら、「まだそんなに使われないし、紙の資料の方が学生も使ってるみたいやし、電子ブック使われるエビデンスってなかなか出てないですよ」とかってつい言っちゃうんですよ。

長坂：もう1つついでに、日本語の電子ブックってほしい紙よりも高い、というのがあります。

江上：それはグッドさんも言ってましたよね。

久保山：今のはあえて反論だったんだけど、まあ最後 DDA の話が出たんで、使われてる環境を調査するとか、使われるような、コードだけじゃないと思うんですよ。大学図書館は電子ブックこんなん買ってますよとか、ポスター作ったりウェブサイトの隅っこの方に出てたりするんだけど、たぶんそれでは学生の行動は変わらない。教員を巻き込んで授業で無理矢理使わしてみるとか、うまみがあるんだったらうまみを感じて使うだろうし、それでも使わないんだったら教え方が悪いのか、ウェブ上の環境が悪いのか、日本社会の情報利用の前提がそこまでいってないのか、いろんな問題があると思います。ただそこに我々はコミットしていくべきかなとは思いますが。

江上：書店さんが来てらっしゃるんですけど、反論とか考えとかありませんか？

林信弘（紀伊國屋書店）：紀伊國屋書店の林と申します。いま日本におけるデジタルコンテンツが、ていう話ですよ。数年前にそのあたりに関わっていて、今ちょっと違う仕事をしてますけれども。それで今も日本語のコンテンツ少ないんじゃないかとか高いじゃないかとかという話もありましたけれども、それこそ買ってもらえないから普及しないとか、普及しないから買ってもらえないとかっていう、鶏と卵の関係が2010年くらいからいまだにそれが続いている、ということが1つだったと思います。飯野さんおっしゃってたように、そもそもメタデータがという話がありましたけれども、長坂さんもおっしゃってたように、質の高いメタデータを作ろうと思うと実はめちゃくちゃコストがかかる。で、やっぱりそれを価格に転嫁していくとなると、結局そんなバカ高い本を誰が買うんだと言われて売れない。そこの妥協の中でやはり今の現実があるということはあるかな、というふうに思います。やはりどうしても日本語のコンテンツが売れるのが、まあ海外でも売れなくはないんですけども、やはり日本のマーケットで売れないことには話が

進まないです。一方で日本の出版流通って、今めちゃくちゃ疲弊の極みに達してますので、そういった意味ではなかなかそこをうまく乗り切っていくだけの体力が業界としてもなかなかないよねと、いうところは一方であるかなとは思うんですけども、じゃあそれでいいと思っているのかというところと決してそんなことはないので、このような状況の中で何とかしたいというのは、それは図書館の皆さんと同じように書店の人間も心からそう思っています。

江上：ありがとうございます。心からそう思っているんだったら、これはそういうシンポジウムやらないといけませんね。そうしないとやっぱり図書館員だけで話をしても絶対に解決するような問題ではありませんので、これはまた引き続き、どこかでできたらなと思うのですが。

楽しい時間が過ぎるのは本当に早いもので、もうそろそろ締めに入った方がいいかなという感じですが。最後に、このシンポジウムは先ほどから何度も言っていますが、先週行われた北米のライブラリアンが語ってくれたシンポジウムのアンサーシンポジウムです。そのアンサーシンポジウムを聞いた上でのアンサーを、先週のパネリストの一人であったワシントン大学のライブラリアンである田中さんから一言お願いしたいと思います。白ヤギさんが送ってくれた手紙を、この黒ヤギさんたちがががつり咀嚼しましたので、また白ヤギさんからお答えを。どうでしたか、今日の4人のお話を聞いていて。

田中あずさ（ワシントン大学）：そうですね。よくまとめていただいて、とても興味深く聞きました。世界のどこにいても同じ共通の問題もありますし、そうでない問題もあります。2点考えたことがあります。まず学生がなぜ図書館に来るのかというところで、図書館の役割ってというのがアメリカでもおそらく変わってきているのではないかと考えながら、皆さんの意見を聞いていました。飯野さんのお考えに近いのかなと思ったんですが、図書館というのはおそらくこれからは物理的な資料だけではなくて、研究者の考え方とか、資料などを交通整理してキュレーションしていくことなのかなと考えています。例えば最近注目されているデジタルヒューマニティーズのサポートなどです。大学のどのセンターに何があるか把握しているとか、この調査に使えるようなプログラムを大学のどのセンターが作っている、というようなことを図書館が交通整理する役割を果たすのではないかと思います。もうひとつ、日本のデジタルアーカイブについて駄目なところはどこか、というのがテーマになっていましたが、よいところももちろんあります。たとえば探しにくくても利用に制限があったとしても、まずはデジタル化されているということ。それはデジタルヒューマニティーズの観点からだけではなく、例えば日本



日本の大学図書館員の論じる世界の大学と図書館～6/25開催のシンポジウムを振りかえりつつ～

語が得意でない人にとっては、紙よりもデジタルのほうが辞書が引きやすくなる、ということがあると思います。

江上：ありがとうございました。

(編集：江上敏哲)